

※フジテレビを辞められた30年ほど前、全国放浪の中で銭函に在住されたことがあり、当時まほろばをご利用いただいていたそうです。今回、東京のお店で買われた「七五三塩」がご縁でおたよりをいただきました。

「いのちへの旅」の途上にて

古希の旅・最終報告

やまかわ ゆきお
山川 建夫

二〇一三年十二月十日。

その前の月に古希を迎えていたぼくは原発事故に背中を押されるように、最終的にこの国をふた回りすることになる旅に出ました。



その旅の中でご縁をいただいた方々に、旅を終えてから「古希の旅・中間報告」をお送りしました。それからさらに一年余りが過ぎました。

かつての美しさを失ったこの国の自然と、加速度的に激しさを増す気候変動を身をもって体験したものと、今、世界から起こっている「異常現象」が、ぼくたち現代人に対する地球からのメッセージであることをお伝えするのが自分の役目だとの思いから「旅の最終報告」をお届けしようとしていた矢先、「西日本豪雨」が発生したのでした。



二〇一四年六月二十二日。ぼくは北海道の支笏湖畔に建つ、北海道大学の先生の山小屋に宿をお借りしていました。その晩から明け方までの僅か七時間ほどの間に五〇〇ミリを超える雨が降ったのです。それまでの雨の概念を覆す、まるで滝の真下にいるようなドーンという猛烈な連続音。全ての明かりが消えた真の闇の中で、耳をつんざく、まるで屋根全体が落ちてきそうな轟音に包まれて、このままいつたらどうなってしまうのかという未知の状況に対する不安にひと晩中襲われていました。ぼくにとつてはもちろん初めての経験でした。幸い明け方には雨は止みましたが、支笏湖を周回する道路は到る所で寸断されていました。

その二ヶ月後、広島市安佐南区、安佐北区の豪雨で四〇〇戸の住宅が土石流に押し流され、七十七名の方々が亡くなりました。ちょうどその時、大阪にいたぼくはすぐに広島に向かいました。現場を見てすぐにそれが「人災」であることをぼくは理解しました。こんな急傾斜地に住宅開発するのは俄に信じられませんが、土地は安いし、業者が市場価格よりずっと安く売り出せばたちどころに完売してしまうとのこと。それを承知で建設許可を出した行政の無責任さが更に信じられませんでした。現場の危険性が分かっていた職員もいたのでしょうか、背後に政治家が絡んでいたらどうにもならなかったのかもしれない。

いずれにしても、自分の身は自分で守るしかない、七十七名の人命が失われた現場が教えてくれました。

それ以上に衝撃を受けたのが昨年七月の「九州北部豪雨」でした。

福岡県朝倉市、東峰村、大分県日田市を一〇〇〇ミリの雨が駆け抜けていきました。朝倉市黒川にぼくの友人がアトスペースを運営しているので、何度も訪ねていったことのある場所でしたが、そのあまりの変わりように、ただただ手を合わせしかありませんでした。ここは広島市の新興住宅地とは違い、地元の方たちが何百年も前から土地に根差し暮らし続けてきました。そこへ、ピーク時、三時間で四〇〇ミリという信じられない大雨が谷ごと削り取ってしまいました。川底に埋まっていた家一軒分ほどの大岩が激しい降雨による激流で露出し、ゴロゴロ転がって下流の家を丸ごと突き破った現場は、自然のパワーが人間の想像力など簡単に超えてしまうことを示していました。

そして、この度の「西日本豪雨」。

広島、岡山、愛媛県を中心に、西日本の広範囲に及ぶ地域が豪雨に見舞われました。「九州北部豪雨」では僅か数キロの幅だった線状降水帯が、本州を東西にわたり横たわっていた梅雨前線を幾筋にも通過していったようです。記録的な大雨と、上流で決壊の危険にさらされたダムからの大量の放水とが重な

り、二階に避難する余裕もないほど、アツという間に浸水したそうです。

ダムの放水に関しては、二〇一一年、和歌山県熊野川水系での洪水でも、決壊を恐れて放流された大量の水が被害を拡大したことが知られています。その後現地を訪れた時、二〇〇〜三〇メートルの高さの木の枝に引っ掛かっているブルーシートを何ヶ所も目撃して、水害の規模を実感したものでした。

年々、激しい気候変動によって予測がつかないほど降水量が増大していく中で、洪水時、被害を何倍にも拡大してしまうダムの問題が新たに浮上しています。

そして、「西日本豪雨」に続く連日の猛暑。

この夏、七月早々の梅雨明けから猛暑日が続く、これまでの最高気温の記録が次々に塗り替えられました。猛暑は地球規模のようで、カリフォルニアやギリシャでは五十三度を記録。発生した山火事が燃え広がり、消火活動が困難を極めているとのこと。

昨冬のシベリア寒波の中心地のサハ共和国では、当時のマイナス六十八度から一転、連日三〇度を超える暑さが続き、永久凍土上に建設された舗装道路が波打っているという。

また、英国では五〇日間一滴の雨も降らず、連日三〇度超の暑さが続いているとのこと。そしてこの国で七月早々から続いていた猛暑日が突然途切れたと思ったら、八月十七日、北海

道大雪山系の黒岳で初雪を観測。もちろん初めての記録だとい
う。

初めてのことが次々に起こる。わたしたちが慣れ親しんでき
た穏やかな四季の巡りは失われ、異常気象が異常でなくなる。
降れば豪雨、洪水。降らなければ早魃で稲も枯れる。冬と夏の
激しい気温差だけでなく一日の気温差も平気で二〇度を超え
る。気候の変動が激しさを増すばかりです。台風もいよいよ日
本の近海で発生するようになり、しかもその進路の予測がつか
ない。先の台風十二号は伊豆諸島から本州を真西に九州まで進
み、東シナ海を南下して九州南方の海上でクルクルと輪を描く
ような動きをしてから中国大陸方面へ消えるという、まさに逆
走台風となりました。とにかく予測のつかないことが次々に起
こります。



誰が見てもこれまでなかったおかしなことが起きています。
しかも地球規模で。

それなのに戦慄すべきことに、この激しさを増す気候変動に
対して、人間社会は世界的にも何の対策も講じていないのです。
本当に信じられないことです。

唯一、世界の首脳が集まって決めたのが、今世紀末のなる
べく早い時期に二酸化炭素の排出をゼロにするという「パリ協
定」。単なるお題目のようなものです。だから、トランプ米国

大統領がパリ協定からの離脱を表明しようがしまいがどちらで
も同じことなのです。

いずれにしてもこの地球上に、わたしたちがこれまで経験し
たことのない、気象庁の予報官の言葉を借りれば、「命の危険
がさしせまった異常な事態」が起こっていることは間違いあり
ませんし、その事態が時とともに急速に進行していることも確
かなのです。

それは、十八世紀後半から始まった産業革命以降のエネルギ
ー消費量の伸びとびったりシンクロしています。明らかに人間
活動が原因です。でも先ほどのトランプ大統領に代表されるよ
うに、「人間活動が原因ではない」と主張する人たちもいます。
そうであっては困る人たちです。そうした人たちも含めて今、
この地球上の人間の行ないの丸ごとが問われているのです。

地球を搾取してモノに変え、大量生産、大量輸送、大量消費、
大量廃棄という大量にエネルギーを消費する流れの中で、ひと
握りの人間がマネーを集中的に獲得する過程で地球を壊し汚
す。生まれたばかりの赤ん坊から死にゆく老人まで、そして地
球の隅々までマーケットにし尽くした、「グローバルイズム」と
名づけられた怪物を生み出した資本主義
体制そのものが問われているのです。

今、地球上で起きている激しい気候変
動は、膨大なエネルギーを消費する資本



主義体制が変わらない限り、収束に向かうことはないでしょう。この時代を生きる現代人にとっての最大の課題は言うまでもなく、今起きている人類史上最大の異変をいかに克服し、乗り越えるかです。

地球生命の将来を左右するこの深刻な事態に、わたしたちはあまりにも無関心のように見えます。自然相手のことだから不可抗力と諦めているのでしょうか。このくらいならまだ大丈夫だと高をくくっているのでしょうか。エアコンを全開にしてひたすら耐えるだけだと思っただけなのでしょうか。わたしたちが使うエアコンからの排熱と、日中貯えられたコンクリートやアスファルトからの排熱が相俟つて、環境中へ膨大な熱エネルギーを放出して気候を変えていることをどう思っているのでしょうか。このまま手を拱こまいでいけば気候変動はますます激しくなり、わたしたちの子や孫たちが厳しい状況に置かれるのが目に見えているのに平気でいられるのでしょうか。気候変動がもたらす豪雨や水害に脅えるだけで、自然が恐いと口走り、まるで自分が一方的な被害者だと思っただけではないでしょうか。

現代人は思考停止をしているのか。本能的に危険を察知し、回避する動物的な直観力を失い、大脳新皮質の上っ面だけで、今起きている激しい気候変動を単なる知識としてしか受け止められなくなってしまうのでしょうか。

今、目の前で起きていることをリアルに受け止め、わたした

ち現代人が被害者ではなく、地球に対する加害者であり、この事態は他ならないわたしたち自身が引き起こしていることに気づく必要があります。その気づきがわたしたちの子や孫のこれからの世代を救い、地球上のあらゆる生きものたちを救う第一歩になります。

とは言うものの、わたしたちが日々メディアから受け取る情報は膨大です。戦後、メディアからの情報は経済成長の上昇曲線に連動して増大してきました。ぼくがテレビのワイドショーに毎日出ていた一九七〇年当時、「番組の中で生CMで紹介した新商品を『今、テレビで宣伝していた〇〇を下さい』とスーパーに買いに来る人がいる」と、レジ係をしていた知人から聞いたことがあります。当時既に、消費行動がテレビと直結していました。

それから半世紀近くが経過し、メディアが作り出す情報世界が現実だと思ってしまう人が圧倒的に増えました。自分では批判的に見ているつもりでも、その影響力は信じられないほどの強力です。風の流れ、匂い、温度差：など、自然からの直接的な情報をキャッチするより、人間が作り出す情報に接することの方が断然多い筈です。どんなに冷静に接していると思っても、いつの間にか人工的な情報、つまりバーチャルリアリティにどっぷり浸かってしまうのです。そして、この資本主義



体制がつくり出す現実を本当の現実だと思い込んでしまうので
す。

その一方で、メディアを通して報道される地球規模で起きて
いる気候変動を、わたしたちの生存を左右するものとしてリア
ルに受け止められなくなってしまうのです。

メディアがつくり出す「現実」。「地球で急激に進行する気
候変動という「現実」。

それぞれふたつのリアリティ。しかしどう見ても前者のリア
リティが後者のそれを圧倒しています。

今、大切なことは、自然のリアリティを研ぎ澄ませることで
す。自然のリアリティを取り戻すことです。人間がつくり出す
「リアリティ」ではなく、自然からの直接的なメッセージを全
身全霊で受け止めることです。



現在、国際社会では「パリ協定」を受け、地球温暖化が引き
起こす気候変動の原因物質である二酸化炭素の排出を、ゼロに
近づけるための脱炭素化へ大きく舵を切り、再生可能エネルギ
ーの導入をこれまで以上に進めていくとしています。

ここで使われている「地球温暖化」という用語ですが、
一九七二年にスウェーデンのストックホルムで開かれた地球環
境に関する初めての国際会議である「国連人間環境会議」に提
出された、ローマクラブによる有名な「成長の限界」という提

言以降、使われるようになったと思われます。その内容は、「地
球という有限な閉じた環境の中での無限の物質的な成長など不
可能であり、敢えて進めれば近い将来、必ず破綻を迎える」と
いうものでした。

その当時、人間社会が飽くなき経済成長に突き進まず、地球
環境と真に折り合った循環型社会を目指していれば、現在のよ
うな異常気象が常態化することはなかったと思います。でもそ
うはなりませんでした。地球のバランスを無視した経済成長を
進めれば進めるほど、「成長の限界」が指摘していた異常気象
が頻発するようになり、それを覆い隠す必要から「地球温暖化」
などという、現状を誤魔化すようなネーミングを捻り出したの
だと思えます。事実、「暖かくなるのだからいいじゃないか」
などとよく言われたものです。

「地球温暖化」という名称はその後、すっかり定着してしま
いましたが、その原因として温室効果ガス、とりわけ二酸化炭
素がその主犯格として祭り上げられました。さらに、二酸化炭
素は「排出権取引」と称してマーケットで売買に利用される
など、貪欲な資本主義体制の食いものにされていきます。そし
て、二酸化炭素を出さなければ何でも許されるとばかり、原子
力発電所が世界中で建設され、今また太陽光発電や風力発電な
どの再生可能エネルギーへの転換が強引に進められています。
もちろん、再生可能エネルギーに問題があるのではなく、人間

社会が現在膨大に使用しているエネルギー量をそのまま再生可能エネルギーに代替させようとしているのが問題なのです。

巨大開発の時代はもうおしまいです。これからは各家々でエネルギーを自給する時代になり

なります。そして、エネルギー消費を極力減らしながら、地球環境と折り合える地点を探し出していくことになります。

生き残るのか、滅びるのかの決定的な分かれ道にあつて、わたしたちは次の世代へ「いのち」を繋いでいくしか選択肢がありません。

それなのにわたしたちは一体、何をしているのでしょうか。人間社会による地球生命への物質的な介入は、大は地球レベルでの気候変動から、小は遺伝子編集技術を駆使した生命そのものの改変まで、ますますエスカレートするばかりです。

わたしたちは現在進行している激しい気候変動の原因を殆ど二酸化炭素のせいにして、山の斜面を削り、田や畑を潰して太陽光パネルを張りめぐらし、山の尾根や海岸線に巨大な風車を林立させています。また、毎年一億台生産されるというクルマを、ガソリンエンジン車から電気自動車に急速に転換しています。果てはクールビズ、ウォームビズから日常的なエコグッズに至るまで、すべてをマネーがマネーを生む資本主義体制の中に組み込んでいきます。



マネーの時代を終わらせ、「いのち」の時代を迎えるために、山を再生し、大気や水や土を浄化して地球のバランスを取り戻すどころか、熱中症の恐怖を煽り続けてエアコンなどの電力を大量に使わせる。それはまさに、消費させてマネーを吸い上げるといふ資本主義のカルマ的所業であり、そこに寄生する右や左のイデオロギーも、いかなる政党も、議会制民主主義でさえ、それを終わらせることはできないのです。

事は、子や孫たちの次の世代の「いのち」にかかわる重大事なのに、この社会はいまや機能不全に陥っています。

資本主義が極限にまで行き着いた今、世界はますます複雑化し、暴力化し、秘密やウソに満ち、競争が激化し、敵・味方に分断され、紛争が増大しながら戦争へと向かっています。その背景には、身体と精神が蝕まれ、生存のための判断力を失いつつある、わたしたち現代人の劣化があります。

ちなみにこの国では、二年後にせまったオリンピックに挙国体制で臨み、リニア中央新幹線のルートにあたる南アルプスの真ん中にトンネルを掘り、国を守ると称してイージスアショアの導入を準備し、海洋生命の宝庫である辺野古の海を埋め立てています。

地球生命レベルの「現実」と、人間社会レベルの「現実」とのあまりのギャップに思わず目が眩んでしまいます。



貪欲な資本主義が日夜消費し続けているエネルギーによって地球上に放出される膨大な熱。その熱を地球は健気にも宇宙空間に排出し、大気圏内の温度を一定に保とうとしてきました。でももうその能力に限界がきたのです。旺盛な人間活動による熱エネルギーは大気圏内に溜まる一方です。そして、とうとう母なる地球の精妙なバランスを狂わせてしまったのです。地球は発熱し、痙攣し、自分の健康を保つための循環システムがすっかりおかしくなっていました。

そのさまざまな症状が、これまでになかった極端な気候となつて地表に現れているのです。わたしたちが毎日、メディアによつて恐怖を煽られる熱中症に、地球そのものが罹つてしまったのです。

熱中症の治療はまず第一に安静。そして新たな熱の供給を断ち、体を冷やすことです。わたしたちが熱中症にしまった母なる地球の治療には、まずは地球を熱している人間活動にブレーキをかけること。そして、その活動を低下させていくことです。しかしながら、終わりのなき経済成長を驀進する資本主義がそんなことをする筈がありません。この体制にはそもそもブレーキそのものがないのです。

では、どうすればよいのでしょうか。

それには、ブレーキのない資本主義体制という破滅に向かう乗りものからわたしたちが降りることです。グローバリズムを

支えている大量消費を止めることです。メディアにその気にさせられ、買わされていた消費行動を止めることです。そして、本当に必要なものだけを手に入れ、大切に使い切ることです。

さらには消費するだけでなく、必要なものを自分の手で生産することです。米、野菜、布、衣服、家具、住まい……。人々がお力ネと職を求めて吸い寄せられた都市から、今は過疎地と呼ばれる「ふるさと」へ戻るのです。お力ネだけに頼る暮らしから自給自足的な暮らしに戻るのです。地域にしっかりと根を張り直した人々と手を繋ぎ、助け合い、支え合つて新しい暮らしの場をつくるのです。現代版の「結」です。そうした地域のネットワークによつて新しい時代が立ち上がってくるのです。そして気がついたら、あんなにどっぷり浸かっていた、あんなに絶対的な存在だと思ひ込んでいた資本主義という仕組みが目の前から消えてなくなっているのです。

今、そうした動きが徐々に起きてつづつあります。その動きは今後、核分裂反応のように地球上に広がっていく筈です。そして、縄文人の血を引くアイヌ民族や、世界中の先住民と呼ばれる人々がそうしてきたように、わたしたちの「いのち」を支えてくれているかけがえのない母なる地球を尊敬し、大切にし、その恵みの中でつつましく、心豊かに暮らしていくことになるのです。

わたしたちは長い歴史の中で、支配体制の内部に組み込まれ

た貨幣経済にどっぷり浸かり切つてきました。そして、人間がつくり出したおカネという便利な道具にがんじがらめに捌め取られてきました。その中で、次第におカネの奴隷となり、誇りを失い、自分自身をひたすら貶めてきました。

そればかりかわたしたたちの心の内部に巣くう欲望や嫉妬、不安といった感情を支配者たちに利用され、彼らの争いに駆り出され、数え切れないほどの悲しみを生み出してきてしまいました。だから大切な人生の中で、本当のしあわせなど得られる筈がありませんでした。ほとんどの宗教はその救いとして、来世にしあわせを求めました。現世は仮の姿。まさに支配者の思う壺です。

今こそ現世にしあわせを求め、実現する時です。今こそわたしたち自身の手で地球を大切に、地球と共に在る日々をしあわせに生きる時です。

熱中症に罹った地球を治せるのはわたしたち現代人しかいません。人間の欲望のためにこの惑星をズタズタに傷つけておいて、「人間のせいではないよ」と知らん顔をするばかりか、まだこれからも傷つけることなどできるわけがありません。

わたしたちが直面している地球規模の危機的状况は、わたしたちに当事者意識をもたせ、自立心を呼び覚まし、他者を思いやることのできる主体的な生き方を選び取らせるための、母なる地球からの贈り物なのかもしれません。

地球に対するこれまでの無礼を詫び、許しを乞うことを通して、地球と真に和解し、地球と意識を合わせることによって宇宙意識と繋がる。実は人間以外の存在はみなそうしているし、わたしたちの先祖もそうしていたのだと思います。今、それを思い出す時です。

これから先、わたしたち現代人が地球に意識を向けるまでの間、まだまだ厳しい状況に直面するかもしれませんが、「それ」を思い出す人が増えてくるにしたがつて、地球に平穏が戻ってきます。

わたしたちが招き寄せてしまった人類史上最大の危機を乗り越えることによって得られる地球平和と真のしあわせ。それが、母なる地球から、わたしたち人間が生まれかわるために与えられる最大の「ギフト」なのです。

二〇一八年八月末日

山川建夫さん プロフィール

一九四三年東京生まれ。一九八五年フジテレビを退社後、自然の中で暮らしたいという夢の実現のため都会での全てを捨て、中古のワンボックスカーで家族と共に新天地を求める旅に出る。二年半後、房総半島の里山の麓の古民家に落ち着く。以来、畑を耕し薪を称え、部屋も建て増し、米作りまで始める。

現在は、癒しと安らぎを分かち合うフリーアナウンサーとして活動中。日本の伝統的な農的暮らしの体験に基づいた講演活動は好評を得ている。